



光る揺らぎで貴女を
責めたら……。
南海部 覚悟

「“検証！心霊スポット！”——本日は“JR北海道”様の協力を得まして、ひと月前に廃止線となりましたJR石北本線、“常紋トンネル”の心霊現象検証12時間スペシャル……。」



野幌の、広大な森の黒々としたうねりが、群青の夜空の底部に横たわり、明滅しはじめた繁華街のネオンと、何処までも続く紅白のランプの流れが、秋の物悲しさを運んできます。

バルコニーの大きなガラス窓の先には、都市と原野の結界が、明瞭な明暗となって地平線まで続きます。

新札幌、或る高層マンションの一室です。

壁に固定された50インチの4KTVの画面では、今夜のスペシャル番組のプロローグが始まっています。

「私たち撮影班は、約一週間をかけまして、此の有名な鉄道トンネル内部に様々な観測機材・装置を設営してまいりました。その内容は、後ほど詳しくご説明いたしますが、本日これより全ての観測装置に電源を投入し、稼働を開始させます。そして明朝9時まで12時間にわたり、観測状況の一部始終を完全生中継いたします。テレビ〇〇自社制作、遅延送出システム等ではありません。従ってTVの前の皆様は、今宵、総延長507mに及ぶ常紋トンネル内部で発生する全ての現象を、無数のTVカメラを通し、リアルタイムで目撃されるわけでありまして……。」

TVを囲む半円形のソファには、既に酩酊し始めた4人の男女が……。

「ねえ、何で貴女たちこんな北の都まで飛ばされたの？」へらへら笑いながら穴見女医が尋ねます。

「京都府警で成果を挙げられなかったからです！」慄然とした表情で、笑子が呟きます。

「トバッチリなんですよ穴見先生！お前も同罪だから、二人に附いて行けて……。」顔を赤くした奥寺が嬉しそうに高い声を挙げます。

「だって、自衛隊とネグロイドの事件解決したんでしょ、京都で……。」

「――多分、高いレベルからの力が掛かったんだと思います。あの事件に拘わったスタッフは、全員異動してますから。」

カクテルを作りながら、玲子が明るく答えます。

「暫らく、中央に帰すな――ってものの、政府も世知辛いわね。」

「そんな事よりこの番組、今評判なんですよ――今夜は12時間ぶっ通しのスペシャル版で・・・。」

「“検証！心霊スポット！”――放送された心霊スポットは、心霊マニアか否かを問わず、例外なく大変な人出になるみたいですね。」奥寺が話を受けます。

「福岡の“旧犬鳴トンネル”や、大阪の“貝塚結核病院”は、団体客がバスでツアーを組んでやってきて、沿道に出店も並ぶそうですよ。」

「まるでお祭りね、幽霊が店番してたりして・・・。」女医が茶化します。

「――それではここで、常紋トンネルの歴史に関しまして、簡単にご説明いたします。明治後期、北方ロシアの軍事的圧力に対抗して、道北・道東への交通インフラの整備が緊急に求められ、北海道を東西に貫く鉄道路線の敷設が急ピッチで進められました。当路線最大の難所である、常紋峠を貫通する隧道（トンネル）の掘削工事は、主に当初の囚人使役を引き継いだ、タコ（他雇）労働者（土方）達によって進められました。周旋業者の甘言に騙され、東京・大阪の大都市から集められた貧困労務者は、北海道までの旅費を前借金とする契約書を楯に、過酷な重労働を強いられます。一日15時間の肉体労働、粗末な食事は朝夕2回のみ、作業中に立ったまま摂られます。短い休息は、藁葺の粗末なタコ部屋で一本の長い丸太を枕に雑魚寝、朝はその丸太の端を木槌で叩かれていっせいに起こされます。

過酷さに耐えかねて、脱走を試みる者も後を絶たなかったようですが、人里離れた原野最深部でのこと、直ぐに連れ戻され、下請けの親方衆から壮絶なリンチを受けることになります。当時既に存在した、労務に伴う人権に関する法律も、行政の指導も、流石にこの地まで効力を及ぼすことはありませんでした。

栄養不足による病気、体罰による負傷、作業中の事故により36か月のトンネル工期を通しての死者は、資料が全く存在しないのにも拘らず、100名を優に超えると言い伝えられてきました。」

「昭和43年（1968年）この地を襲った十勝沖地震で、トンネル内部が損傷を受け、その補修工事に於いてレンガ壁の奥から、頭蓋に損傷を負った立ったままの人骨（人柱）が発掘され、その後も周辺の地中や山の斜面から無数の人骨が掘り出されるに及んで、当時の人権を無視した非情な労働環境の言い伝えが、真実であったことが実証されました。」

「当然に、トンネル開通直後から、様々な怪奇現象が報告され始めます。当番組でも、過去に幾つかの事例を紹介させて頂きました。それらを受け、昭和55年（1980年）近在の金華信号所の高台に、“常紋トンネル工事殉難者追悼碑”が建立されて現在に至っております。」



部屋の内気が少しづつ冷えてきました、北の大地の秋は思いの外、深まる夜に急かされます。

「エアコン点けましょうか、少し寒くなったでしょ・・・。」

玲子が不安気に立ち上がります。

「幽霊なんて出ないわよね、奥寺君・・・。」笑子が奥寺の袖を引っ張ります。

「——大丈夫よ、殆どが人間の“錯視”だから。」女医が低い声で呟きます。

「錯視？」

「物体がその色によって大きく見えたり小さく見えたり・・・矢印の方向で軸線が長かったり短かったりするでしょ。人間の五感はね、実物の情報をそのまま脳の中で再生している訳じゃないの。意識の中で過去の経験に照らし合わせて都合よく付け加えたり、省略して欠き取ったり・・・病気や薬の影響で現実との乖離が大きくなれば、それはもう幻覚とか幻聴とかになるんだけど、体が正常でも、似たようなことが起こる事例は幾らでもあるわ。」

「——幽霊は幻覚なんですか？」

「人の視野のうち、実際の視界との対応が確認できるのは、全体の約7割だって云われてるわ、残り3割ははっきりと判別できないか、過去の記憶に基づいて処理された映像だって。」

「じゃ、幽霊が発散する怨念や情念は、幻覚を見てる本人の感情だってことですか？」

「―――どういうこと？」

「この娘はね先生、心霊現象ていうのは科学で未だ説明のつかない自然現象のうち、怨念や情念といった人間的な感情を伴って、私たちに関与してくる現象だって考えてるんですよ。幽霊が幻覚だとすれば、それから発散される感情は自分自身のものだって云いたいのよね。」玲子がフォローします。

「そうよ、自然現象が感情を持つわけ無いもの。この世界で、生きてる人間以外に感情を認識できる余地は無いわ。」

「―――そうも云いきれませんよ！」

急に腰を起こした奥寺が、凜とした表情で呟きます。

「“階層世界”という考え方があります。」そう云いながら振り向いて、自分のバックからiPadを取り出すと、電源を入れて起動させます。

若くて可愛らしい白人女性の横顔が表示されました。

「これを仮に“ミクロの女”とします。どんどんピンチインで遠ざかると……。」女性の顔が、それを囲む人々の集まりになり、賑わう街の街路から巨大な都市を上空から見下ろす映像となって、規則正しい道路の線が枯葉色の原野に拡がり、幾何学的なパターンがベージュの濃淡を引き締め、きめ細やかさが増して光沢を獲得し、やがて人の肌となり、再び女性の白い顔が現れました。

「これを“マクロの女”とします、二人の女性は恐らくお互いを認識できないでしょう、しかし同じ世界に確実に二人とも存在するのです。」

「―――じゃ、私たちは女の人の顔を構成する、画素のひとつに過ぎないってこと？」

「喩え話です……。この世の中は全て、直ぐ下の階層世界の画素によって構成されている、仮にその中に人間がいるとすると、あらゆる物に感情が宿ることになります。」

「怖いこと云わないの！奥寺君―――。」

三人の女性が、一斉に声を揃えます。

日が替わって暫らくたった時刻です。

酩酊の進んだ玲子と奥寺は、ソファで既に深い眠りに落ちています。

残る二人の蟒蛇は、ボトル片手に・・・。

「穴見先生まだ帰らないんですかぁ・・・。」

「なあに、帰ってほしいのお？」

「・・・そっか、玲ちゃんとイチャイチャしたいんだあ。」

「そうですよ！早く二人だけになりたいんですう・・・。」

「何時もどうしてるの？・・・玲ちゃんが優しくしてくれるのお？」

「違います！後ろ手に縛りあげて馬乗りになって責めるんですう・・・。」

「——玲ちゃんがあ？」

「私がです！」

「なんだ！あなたがタチ役で、玲ちゃんがネコなの・・・そうよね、あなた浅黒いものね。」

「——何なんですかそれは！」

きわどい話も、呂律の廻らない遣り取りが滑稽です。

「私なら平気よ、此処で見ててあげる。何なら加勢してあげてもいいわよ、玲ちゃん責めるの・・・。」

「あの透き通るような白いお尻の、右下にある小さなホク口の辺りを、細い鞭でペシペシ叩いたらもう・・・。」

「ばかみたい・・・。」

「でも、奥寺君はタクシー呼んで帰した方がいいわね。刺激が強すぎて、きっと身体壊すと思うから・・・きゃはははは！」



その時です、TVの中継に動きがありました。

「トンネル内のセンサーに、かなりの反応が出ているようです。早速、坑口に向かいます！」

走り出したメインキャスターの後を追うように、モニターの前の数人が撮影機材を抱えて坑口に向かいます。

暗い坑口の周囲には、既に何人かのスタッフが集まっていました。

「赤外線カメラと高感度低周波マイクに、顕著な反応が現れたと報告を受けました。坑口のスタッフと共に中に入ってみたいと思います。」

気配の変化に目を覚ました玲子と奥寺も、息を殺してTVの画面に這いよります。

ステディカムに固定した4Kカメラの調子を見ながら、約10名の撮影チームが慎重に歩を進めます。

トンネル入り口から15m程の辺りが、何やらボンヤリ輝いて・・・馬蹄形のトンネル断面に蓋をするように、薄い霧のようなものが、淡い光を発しながら揺らいでいました。

揺らぎの向こう側に、観測機材を設置したコンテナ貨車の終端がボンヤリと見えています。

「―――何でしょうかこれは、初めて見るものです！」

興奮したキャスターの声が、トンネルのレンガ壁に木霊します。

「所々、スパークのように一瞬光が強くなります・・・ああっ、揺らぎを通過する夜の虫が光を放っているのです・・・音はしませんが、腹に響く細かな振動が足元のバラスト（碎石）から伝わってきます。」

描写するキャスターの声が震えています。

「何だか周りの空気が急に冷えてきました・・・坑口から内部に向けて、冷気の流れがあるようです。」

スタッフの一人が線路のバラストをひとつ掴んで、揺らぎに向かって投じます。一瞬スパークが瞬いて、何事も無かったように乾いた音を残して反対側の床に転がりました。

もう一人のスタッフが、集音マイクの柄を伸ばして、揺らぎの中に差し込みます。電気溶接のような火花が飛んで、白い煙を上げてアルミ製の柄が熔け落ちました。

その時です！

「―――それに触っちゃいかん！」背後から誰かの鋭い叫び声が届き、その声を覆い隠すように、魂を揺さぶる低い大きなうめき声が、一陣の突風を伴ってトンネルの奥から撮影チームを襲います。

傍にいたキャスターが、枕木に足を取られてよろけ、揺らぎの中へ倒れ込んだその瞬間―――。

短く哀しげな男の悲鳴に続いて、霧のような細かい血飛沫が、TV画面いっぱいに拡がります。

目を凝らして更に画面を見ると、蹲ったキャスターの体の一部から、灼熱した炭塊のよ

うに、炎がチロチロ上がっていました。

云いようのない恐怖が、人々の体を凍らせます。

立ち尽くすスタッフの間に、低いうめき声がいつまでも纏わりつき、やがて坑口からの冷気が辺りを包み込むと、光る揺らぎもいつの間にか消滅していました。

トンネル内に漲るただならない危険な気配を、4Kカメラが余す処なく忠実に、深夜の家庭に届けていました。

「担当プロデューサーとディレクターが坑口でお待ちしています。」

「観測機材担当の責任者は？」

常紋信号所のスノーシェルターの下に設営された、TV局中継本部の前をトンネル坑口へと急ぎながら、奥寺がスタッフに尋ねます。

「一緒にスタンバイしています。」



TV中継から既に10時間が経過しているのにも拘らず、トンネルの坑口からは、タンパク質の燃えた嫌な臭気が漂ってきます。

「観測機材やセンサーは、どうやってトンネルに設営したんですか？」

「コンテナ貨車22両の上に架材を組んで、JR北見駅の貨物ヤードで機材を取り付けました。」機材担当が答えます。

「ディーゼル機関車で此処まで牽引してきた・・・？」

「———そうです。」

「観測装置の種類は？」

「ドップラーレーダー、磁場センサー、電磁波センサー、プラズマ観測装置に赤外線カメラ、超音波風速計に電子式温・湿度計、各波長域の高感度マイク、振動計に無数の小型カメラ等々です。」

「———電源は？」

「ディーゼル発電モジュールを2台、コンテナ貨車で同じように牽引してきましたが、トンネルに入れますとセンサーに影響が出ますので、信号所で切り離してケーブルを敷設しました。」

トンネルの内部は高輝度のバルーン照明の下、道警北見方面本部の警官と鑑識班、奥寺が指揮する科捜研のスタッフでごった返していました。

歩を進めるに従い、嫌な匂いが強くなります。

「ここでキャスターが亡くなったんですね・・・。」玲子と笑子が手を合わせます。

更に進むと、TVにボンヤリと映っていたコンテナ貨車の終端が見えます。

「コンテナ貨車22両、約450mでトンネルの総延長507mを網羅するわけですか・・・他に観測機材は？」奥寺が機材担当に更に尋ねます。

「レーザーホログラフィースキャナーがありました。“VRA”を使ったものです。」

「——それは？」

「“Variable Refraction Amorphous”と云うんですか、最新の光学技術で、詳しくはこちらのJR北海道の担当者に訊いてください、そちらから提供頂いた機材ですから。」JR北海道の担当技術者は、黒縁眼鏡のいかにも学者風で、堀下と名乗りました。

「5年前に合成された非結晶体なんですが、外部から電圧をかけることで、屈折率と屈折の方向が連続的に変わります。このデバイスを使って、ポリゴンミラーや複雑な光学系に頼らず、レーザー光を好きな方向に照射したり、超高速で走査（スキャン）させることができます。」

「レールや架線の走行検査に使うんですか？」

「位相干渉による3次元情報を取得することができます。」

貨車の上の魚眼レンズ状の装置を指差しながら、機材担当が口を挿みます。

「ドップラーレーダーより正確に、移動体の立体映像を撮ることが出来るんですよ。今回、観測機材のうち最多の計440セットを設置して頂きました。」

「これだけの数、準備・運用したのはJRグループとしても初めてです。」

何処かで訊いた声だと思った瞬間、笑子が背中を突っつき、押し殺した声で「皆んな何話しているんですか？幽霊の仕業に決まっているじゃないですか。TV見てたんでしょ？」

「幽霊に殺人できないでしょ・・・短絡的にものを考えないで。」

「そんな事分からないですよ、SNSの書き込みは“幽霊の存在が実証された”とか“殺人幽霊”だとか大変なことになっていますよ。」

「奥寺君はね、今回大抜擢で北海道警SRI（科学捜査研究所）の責任者に昇進したの。“幽霊が被疑者です”なんて死んでも云えないじゃない・・・昨夜のTV中継の全てを、何とか科学的に説明しようと必死なのよ。」

西の空が俄かに暗くなり、この時期の道東には珍しく強い雨が降ってきました、遠雷も瞬いて、事件の不気味さを象徴しているようです。

「もう10年近く司法解剖やってるけど、あんなの初めてよ。解剖中に気分悪くなったのは最初のとくと2回目だわ。」

「死因は、皮膚呼吸不全？」

「胸部熱傷に伴う肺呼吸不全による窒息死。火傷で体液が失われて、皮膚が硬くなって肺を膨らませなくなっただのね。皮膚呼吸できなくても人は死なないわ。」

北大医学部北棟の長い廊下の端で、穴見女医がソファの上でぐったりと蹲っていました。

昨夜の蟒蛇の迫力は見る影もありません。

「全身熱傷の場合、体液損耗によるショック死が普通なんだけど、今回胸部の損傷が酷くて、着衣と共に一部組織が炭化していたわ。急激な体液の蒸発に伴って破裂したような部位が無数にあって、酷いものだった……。」

「損傷を受けた原因が何か、見当つきますか？」奥寺が暗い声で尋ねます。

「分からない……まるで生きた人間を電子レンジに入れたみたい。でも、熱傷の深さはそれ程でもない、真皮までが沸騰した感じ……熱傷範囲も頭部と胸部を中心に、体の前面に限られてるわ。」

「体の裏側、背中なんかに損傷はないんですか！」

「一一無かったわ、不思議な話ね。」

玲子の方に振り返ると、「黒木さん、確かキャスターは光る揺らぎに対して、前向きに倒れ込みましたね！」

「そうね、突風があってその吹き返しで枕木に躓いたように見えたわね。」

昨夜のTV画面を思い出しながら玲子が答えます、笑子も隣で頷いています。

「黒木さん、悪いけど研究所に戻って検証してみます、何か分かったような気がします。」そう云うなり、長い廊下を駆けて行きました。

窓の外は暗い夜に雨が降り続いています。

食事ものどに通らないという女医を、二人はホテルに送り届けます。

「もう、北海道ですることもないから、明日の便で京都に帰るわね。昨夜は有難う、休暇取ってやってきて正解だった。貴女たち二人、精々励みなさい。京都に来るときは連絡してね……。」



マンションに帰る車の中で、「穴見先生可哀そう・・・折角の休暇なのに。」玲子が女医に同情します。

「北大医学部の要請を受けて立ち会ったんですよね、あの蟒蛇女、解剖医の世界じゃ有名みたいだから・・・。」ハンドルを握る笑子が答えます。

「―――ひどいわね、あんまり悪口云うと切り刻まれちゃうよ。」

「玲子さんのお尻の右側に、小さなホクロが在るって云ってましたよ。何処で見せたんですか？」

「マイクロドローンの事件のとき裸で検査されたじゃない・・・あなた穴見先生のことになると、直ぐに熱くなるのね。」

「その白い透き通るようなお尻を、細い鞭でペシペシ叩いたらって・・・やっぱり変態ですよあの医者。」

「後ろ手に縛りあげて、馬乗りになって責め廻すのも、他人から見れば変態じゃないの？」

「―――なんだ、嫌なんですか！」

「そうじゃないけど・・・。」

翌朝、事件現場臨場報告を兼ねて、道警本部で捜査会議が開かれました。

道警本部長がまず口火を切ります。

「本事案は、東京のキーステーションを経由して、深夜とはいえ事件の一部始終が全国にTV中継された。“幽霊の仕業だ”とかいう怪しからん意見もあるが、人が殺された以上被疑者が必ず存在する。北海道警察の威信にかけて犯人を必ず逮捕する。尚、云うまでもないが、メディアの動向に最大限留意すること・・・。」

刑事部長の朝永が、後を引き取ります。

「事件の経緯については、ここさ居る全員既に了解していると思うので、説明を省略します。本日は、科捜研の奥寺所長から科学的な見地での本事案の説明さ受けます。」

奥寺が立ち上がって説明を始めます。

「現時点で分かっているところを説明します。」

「被害者のキャストが熱傷を負った原因は、この“光る揺らぎ”が持つ高密度エネルギーに起因すると考えています。」

TVモニターにその時の映像が再生されます。

「そのエネルギーの由来が何であるか、未だ解明されていません。」

「――幽霊よ。」最後列に座っていた、笑子が小声で呟きます。

玲子が唇の前に人差し指を立てて、「シッー！」

「これは、番組を制作したTV局から取得した、事件直前のトンネル内の小型カメラの映像です。」

TVモニターがマルチ画面に切り替わります。

「22両のコンテナ貨車其々に4セット、計88台のカメラが設置されていましたがよく見てください、どのカメラにも“光る揺らぎ”が映っています。」

「どういうことですか？」

最前列の若い刑事が質問します。

「つまり、この現象はトンネル内の至る場所で、同時に発生していたことになります。詳しく画像を検証しますと、丁度各車両の連結部分の辺りで主に発生しているようです。」

「高いエネルギー密度で、大量の熱が発生します。一両20mの区切られた空間で不安定な空気の対流が生じます。」

「それで、温度計や赤外線カメラに反応があったわけだべ。」

「坑口から冷気が流入したのも説明が付く。」

場内が俄かに騒然となります。

「この時点で、既に電磁波センサーやプラズマ観測装置に反応が出ています。低周波マイクと振動計が反応したのは、対流風による車両の動揺の為だと考えます。」

「それからどうなるんだ！」本部長が椅子から身を乗り出します。

「よく見ててください、全ての“光る揺らぎ”が列車の後方、つまり撮影チームのいる方向に物凄いスピードで移動します。」

長いプラットホームに連続する、駅の常夜灯を、夜行列車の窓から高速で眺めるような光景が、モニターのマルチ画面に映し出されます。

「不安定に対流していたトンネル内気が、後から後から来るエネルギーの塊によって出口方向に一気に押し出されます。」

「——トンネル奥からの突風か！」

「低くて強いうめき声も、これで説明できるかと思います。」

「それで、キャストが倒れ込んだ一番手前の揺らぎは、どうなるんだべ？」

刑事部長の朝永が、じれったそうに画面を覗き込みます。

「其処に、トンネル内全ての“光る揺らぎ”が集約されたんだと思います。想像を絶するエネルギー密度だったと考えます。」

「それと、亡くなったキャストの熱傷は、体の前面に限られます。キャストは前につんのめるように揺らぎの中に倒れ込んだ。つまり、加熱の方向はトンネルの内側からです。従って私たちは、エネルギーの由来がトンネル外部からではなく、内部に設置さ

れた観測装置に起因すると考えます。」

人々のため息とともに、場内が一瞬静まり返ります。

「でも、それだけのエネルギーの集中を生じさせる装置が、観測機材の中に在るんでしょうか？」先程の若い刑事が頭を傾げながら、質問します。

今にも手を挙げて、発言しそうな笑子の口を横から抑え込んで、低い声で玲子が呟きます、「幽霊だなんて、絶対云わせないから——。」



「使われた観測装置やセンサーの殆どは、パッシブなもので、外部に対してエネルギーを生じせしめるのは、ドップラーレーダーとレーザーホログラフィースキャナーですが、何れも単体では微々たるエネルギーレベルで、人に熱傷を負わせるような高いエネルギーを扱う観測機材は、見当たりません。」

「困ったな、それで科捜研所長としてどうするつもりだ？」

道警本部長が、困惑しきった顔で奥寺を見ます。

「昨夜、東大の友人から私宛にメールが届きました。箱根在住のある学者が、今度の事案に関して私に会いたいそうです。なんでもレーザー兵器の研究者で、役に立てるんじゃないかと言っているようです。」

「———分かった、出張を認める。必要なスタッフ全員連れてけ。」

「黒木刑事と白河刑事の同行をお願いします、他は必要ありません。」

刑事部長の朝永に挨拶に顔を出した奥寺が、玲子と笑子の席の前で、「出張前に、確認したいことがあるんです。TV局の機材担当、任意同行要請できませんかね？」

「———いいわよ、じゃこれからしょっぴいて来るから、待ってて。」

勇んで笑子が出て行きます。

「機材担当って現場で話したあの人？どうかしたの？」残された玲子が奥寺に尋ねます。

「VRAの本体と、コントロールユニットは、技術を提供したJRが準備したらしいんですけど、レーザー発振器本体はTV局が取り寄せたらしいんです。オプティカル分野のパーツは、TV局や番組制作会社にいろんな取引ルートが在るみたいで・・・実際ど

んなものを使ったか、確かめたいんです。」

「―――レストランの前で車に乗るのを見つけて、任意同行求めたら断られたから、覆面パトで散々追いかけてまわして、交通機動隊に連絡して速度違反でキップ切らせたの、そしたら飲酒運転だって。」

「じゃあ、気兼ねなく尋問できるよね。」

奥寺が嬉しそうに呟きます。

10分程で、取調室から玲子が出てきました。

「―――吐いたわよ、奥寺君。」

「当初予定してたレーザー発振器とは別の品番を使ったみたい・・・出力が20倍以上だって云ってたわ。中国の業者への発注ミスで、外形が全く同じだから、機材担当以外誰も気付かなかったようね。経産省へ届け出が必要なんだけど、時間もないし自分のミスを隠したくて、黙っていたみたい。」

「―――よく喋りましたね。」

「飲酒運転と引替なら、誰だって喋るわよ・・・。」



箱根の学者は、眼光鋭い痩せぎすの老人でした。如何にも物騒な、兵器研究者の風貌です。

「あの夜の中継を見てね、20年ほど前に大学でやってた研究を思い出したんだ。当時は、VRAなんてものが無くてね、なかなか上手く行かなかった。」

「今日は、VRAと市販のレーザーポインターを使った装置を準備したから、20年前を思い出して、再現してみせよう。」

貨車の上にあった魚眼レンズと同じような装置が20個、机の上に碁盤目状に並び、学者が装置の側面から円筒状のレーザーポインターを挿入していきます、ポインターのスイッチを入れても、光の軌跡は見えません。

「―――VRAのコントロールドライバを起動するよ。」

その瞬間、机上にドーム状の揺らぎが発生しました。

「あ、あの“光る揺らぎ”よ！」

見ていた笑子が大声を挙げます。

「空気中の細かな塵を、レーザー光が反射して揺らいでいるんだ。君、ちょっと其処に

手を突っ込んでみなさい。」

笑子が恐る々手を伸ばすと、「熱っ！」慌てて耳たぶを摘まみます。

「どういう原理なんですか？」

玲子が学者の目を見ます。

装置からポインターを2本抜き取り、部屋の照明を落とすと、「こうやって暗くすると光の軌跡が見える、2本の軌跡を交叉させる、交叉した点は他の部分よりエネルギー密度が高いのは分かるだろ？ 20本のレーザー光を一点に交叉させる。そして、交叉した点そのものを、VRAによって走査（スキャン）するわけだ。今回は机の上にドーム状に走査した。そこに手を突っ込むと多少熱くなるわけだ。」

「膜状にエネルギー密度の高い部位を作れるわけですね？」

「研究してた頃は“Laser Membrane Shield”と称していた。」

「目的は？」

「マクロには弾道ミサイルの迎撃。当時北朝鮮のミサイルが脅威だったからねえ、ミクロには狙撃防護。ただ、狙撃防護に関しては、アメリカで大気のダイラタンシー効果の研究が進んでいる、空気の粘性を高めて、弾丸が飛翔できなくする研究だ。そっちの方が有望だろう。」

「VRAのコントロールドライバも先生が開発されたんですか？」

「VRAが市場に出始めた頃に、様々なパターンのドライバを作ってネット上にアップした。今でも私のホームページに残っている筈だ。」

箱根の山を駆け下りる車中です。

「事件の全容が分かって来たんじゃない！」

「そうですね、北見署待機のスタッフに連絡して、VRAのコントロールユニットの中の、ドライバを調べるよう指示したところです。あの学者が作ったものと同じなら、決まりですね！」

「被疑者も、大体見当がつくわね！」

「——誰なんですか？」

ハンドルを握る笑子が、怪訝そうな顔で尋ねます。

「幽霊よ！」

「——意地わる！」

帰着した札幌は朝からひどい雨でした。

奥寺が塞ぎ込んだ顔で、カップルを待っています。

「どうしたの奥寺君？北見署のスタッフから連絡あった？」

「貨車のコントロールユニットに、あの学者のドライバは入ってなかったようです。TV局とJRとで打合せて作った、スキャンパターンだけらしいんです。」

「それで塞ぎ込んでるの？途中でドライバを割り込ませることは？」

「VRAまで有線で接続されてますから・・・待てよ、ユニットの先は確か・・・。だとしたら何をアンテナに・・・そうか！レールか！」急に目を輝かせて、「黒木さん、白河さん！これから一緒に常紋トンネルまで行ってくれませんか！」

「いいけどどうしたの？何か解った？」

「事件を解決しに行きます！全て解りました！」



常紋トンネルも大雨に見舞われていました。

無数の沢を赤茶けた泥水が流れ下り、色づき始めた山の木々も、雨霞に覆われて見通しが利きません。

黒雲に覆われた上空を、乾いた雷鳴と鋭い稲妻が走ります。

北見方面本部（北見署）で指揮を執っていた刑事部長の朝永が、巨体を揺らしながら信号所から登ってきます。

「ご希望通り、JRの軌道担当責任者を連れてきた・・・どうだ、解決しそうか？」

それには答えず、「信号用軌道回路の、絶縁区間を教えてください！」

「――トンネル内部が、ひとつの絶縁区間になっています。」

軌道担当が答えます。

「絶縁ジョイントの位置は？」

「坑口から入って直ぐです、停車してる貨車の先頭車両の下辺りです。」

軌道担当者が先導してトンネルに入ります、坑口から雨が滝のように落ちてきて、全員びしょ濡れになります。

耳を劈く雷鳴と重なって、車のエンジンがかかるような音が耳を掠めました。

軌道担当者がさし示したレールジョイントのすぐ横から、溶接されたケーブルがバラス

トの下に伸びています。

「変だな、この位置からの接続は無いはずなんですが・・・。」

ケーブルを追うと、トンネル退避抗奥の、真新しい配線ボックスに繋がっています。

「何の配線ですか？」

「——見覚えがありません。」

軌道担当が首を傾げます。

「恐らく、被疑者が設置したドライバユニットです。これとレールを繋いでレールをアンテナにして、VRAのコントロールユニットに割り込んだんでしょ。」

「——でも、今朝VRAは有線で繋がっているから、割り込めないって言ってたじゃない。」しゃがみこんだ奥寺の頭上から、笑子が声を掛けます。

「貨車設置のコントロールユニットからVRAまでは、電源ケーブルと一緒に有線で繋いでいるが、コントロールユニットから先は、スノーシェルター下のTV局中継本部にあるマザーユニットに無線でデータを送信している。同じ周波数の、より強い電波で侵入すれば、既存のドライバをキャンセルして、このユニットでコントロールできる筈だ。」

「このユニットを調べれば、全て解る！」

配線ボックスを、壁から取り外して、脇に抱えたその瞬間でした——。

雷鳴とは明かに違う低い振動を肌で感じ、振り返ると、あの“光る揺らぎ”が目の前に出現していました。

空気が坑口から緩やかに流れ始め、トンネルのあらゆる方向から、表現しようのない様々な音が聞えてきます。

薄いエネルギーの膜のその先を眼を凝らして見通すと、ぼんやりと暗い人影が、瞬く雷光に照らされて、白い顔の虚ろな目が、貨車の上から見下ろしていました。——瞬間、そこにいる全員の意識が凍りつきます。

「ギィヤァ——！」坑内の諸音を圧倒する、笑子の悲鳴がトンネル内を駆け巡ります。

思わずたじろいで立ち尽くす諸氏を尻目に、人影はゆっくりと振り向いて、音も立てずに遠ざかります。

玲子が揺らぎに走り寄って、「堀下さんですよ！JRの堀下さんですよ！そっち行っちゃ駄目！帰って来て！」

バラストの床を沸き立てる強い振動が、全員の足元を突き上げ、トンネルの奥から異様な臭気が、高い金属音を伴って襲ってきます。

よく見ると、密度の濃い砂煙が、渦を巻きながら迫ってきました。

「揺らぎが集結し始めた！」

「違います！これは自然現象——落盤だ！」

「——全員退避！」

北見市赤十字病院の病室に、関係者4人が集まっています。

玲子がトンネルから逃げる途中、転倒して腕を骨折し入院、他の面々は幸いにも軽傷でした。

朝永が引き戸を開けて入ってきます。

「常紋トンネルは全滅だべ、内部さ土砂が充填されて手が付けられんらしい。」

「さっきTVで、生田原側の坑口から崩壊が始まって、坑内を土砂が走り抜けたって説明してました。」

「トンネルの奥から、土石流が襲ってきたときは、生きた心地がせんかった。てっきり白河の悲鳴で崩落さ起こったと思ったぞ。」

笑子のキッとした目が、こちらを睨みます。

「JR北海道はもう、復旧させないでしょうね・・・。」

「金もないし、廃止線だしな。」

「それより奥寺所長、配線ユニットの分析は終わったべか？」

「内部ストレージから、箱根の学者のものと同じドライバが確認されました。ホームページからダウンロードしたものだと思います。それと、ユニットカバーの内側から指紋が採取されまして、堀下の自宅から取得した指紋と一致しました。」

「ユニットを取り外したのに、どうして“光る揺らぎ”が現れたの？」

玲子の袂で、椅子に腰を下ろし甲斐々しくリンゴを剥く笑子が尋ねます。

「507mに及ぶトンネルだ、ユニットがひとつだけだとは考えにくい。それと、信号所の端に留置されてたディーゼル発電モジュールを調べたら、リモコンスターターが設置されてた。何処かで、遠隔操作で起動したんだ。」

「でも・・・先輩は何で被疑者が堀下だと気が付いたんですか？」

剥き終わったリンゴを、小皿に装いながら玲子の方を見ます。

「声よー。常紋トンネルで最初に会った時、以前に一度聴いた声だって思ったの。」

「それは？」

「ほら、TV中継の時、キャスターたちの背後から“それに触っちゃいかん！”って叫んだ声・・・。」

奥寺が話を引き継ぎます。

「その直前に、スタッフの一人が差し込んだアルミの棒が、揺らぎの中で溶けただろ、それを見て吃驚したんだと思う。思った以上に出力がある・・・堀下はレーザー発振器の品番が変更されていたことを、知らなかった。」

「でも、本番前には必ずテストをするでしょ、そこで分かるんじゃない？」

「――それについては、うちの若いのがTV局のスタッフから話を訊いてるべき。レーザー発振器は納入が遅れて、北見駅の貨物ヤードでの作業に間に合わなかった、トンネル内でスタッフ総出で取り付けたようだ。作業が終わったのが放送開始30分前で、1回もテストをしていない、ぶっつけ本番だったようだべ。」朝永がポットのお茶を湯呑に注ぎながら答えます。

病室の窓下から、北見市内の活気が伝わってきます。

降り続いた豪雨も昨夜のうちにピリオドを打ち、爽やかな秋晴れが広がって、雨に洗われた遠くの山々に、愈々紅葉が深まっています。

「堀下は、何でこんな事を実行しようと思ったんでしょうねえ・・・？」

リンゴを摘まみながら、玲子がしみじみ呟きます。

「堀下の父親は、北見駅の駅長さずっとやっていた。定年で退職して静かに暮らしていたんだが、3年前に石北本線の廃止が決まると、急に体調を崩して他界した。退職直後から廃止反対の運動を細々と続けていて、日頃“地域に在る施設で、継続して人を集められるものを見つけよう”というのが口癖だったらしい。父親さ意志を受け継いで、そしたら演出を思いついたのかも知れん。」

「常紋トンネルの幽霊？」

「VRAの縁で、JR北海道の幹部とTV局の幹部とを引会わせたのも、堀下だと訊いています。害はないがインパクトのある演出で、人々の関心を引こうとしたんじゃないでしょうか・・・。」

「堀下の遺体は未だ見つかっていないんでしょう？」

「トンネルの奥さ埋まっているなら、発見は難しいっしょう・・・被疑者所在不明で、書類を廻すことさなるかも知れん。」

「最後のあの人影は、本当に堀下だったんでしょうか？揺らぎが出現する前に私たちの横をすり抜けて、貨車の上に上がったというのが信じられない。顔に全く生気がなかったけれど・・・。」

「先輩、やめて下さい！」

「白河、もっと面白い話がある。堀下の4代前まで戸籍を辿っていくと、住所が大阪西成区の愛隣さたどり着く。貧困労務者が屯する有名な地区だ。そこから急に北海道の北見さ移転したとすると・・・。」

「――タコ部屋労働者？嫌だもう！」



日が暮れて男二人が帰ると、カップルだけの室温が急に下がります。

エアコンのスイッチを入れる笑子を見上げながら玲子が呟きます。

「結局、トンネルが崩壊して、明治以前の自然に戻ったわけね・・・辛い思いをした人々の、永遠の墓標になるんだわ・・・。」

ベッドの端に腰を下ろした笑子から、小麦色の腕が羽根布団の下の玲子の敏感な部分に伸びてきます。

「笑ちゃん！こんなところで・・・。」

「今晚、宿泊の許可とってますう。私が泊るから、夜の巡回もしないそうですう。」

「——あなた、病人を責めあげるつもり！」

「違いますよ、ずっと寝てて腰が痛いだろうから、摩ってあげるんですよ。偶には変なところに指が入っちゃうだろうけどお。さあ、お尻出しなさい！あれ、玲子さん、お尻のホク口無くなってますよ・・・。」

この世に実体を持たぬ意識の情念は、往々にしてこの世の存在を搾取したがるものです。この時も、黒木玲子を構成する画素のひとつを、実体のない情念が拉致したのかも知れません。もし、ホク口のひとつが急に消えることが在ったら、貴女に纏わりつく情念の仕業かも知れません・・・・・・・・。

おわり。

以上、全てフィクションです。登場する個人、団体と一切の拘わりはありません。悪しからずご了承ください。

尚、添付する写真は、全てPhotockより転載させて頂きました。

光る揺らぎで貴女を責めたら・・・。

<http://p.booklog.jp/book/116817>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116817>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト